

## バルトリハリの言語哲学における 時間 論の位置づけ

広島大学 李 宰炯<sup>イ ジェヒョウ</sup>

バルトリハリは主著 *Vākyapadīya* (以下 VP) 第三卷第九章すなわち『<時間> 詳解』章を次のような詩節で始める。

VP3.9.1: vyāpāravatyatirekeṇa kālam eke pracakṣate / nityam ekaṃ vibhu  
dravyaṃ parimāṇaṃ kriyāvatām // (「ある者達は次のように主張する (pracakṣate)。  
活動 (vyāpāra) とは別個に 時間 というものが存在する。その 時間 は、  
常住 (nitya)、遍在 (vibhu)、単一 (eka) の<実体> (dravya) であり、行為 を  
有するもの (kriyāvat) の尺度 (parimāṇa) である」)

彼がこの詩節を『時間 詳解』章の最初に位置させていること、そしてこの詩節において「ある者達」(eke) という表現を使用していることは彼の 時間 論、さらには彼の言語哲学全体を理解する上で非常に重要な意味を持つ。

VP は語ブラフマン一元論の立場から我々の日常的言語活動の成立を解明しようとする作品である。それゆえ、VP 第一卷 (Brahmakāṇḍa) においてバルトリハリは唯一の究極の実在である語ブラフマンについて論じる。そして第二卷 (Vākyakāṇḍa) においては、コミュニケーションの手段として唯一その実在性が認められる単一不可分な文について論じる。さらに第三卷 (Padakāṇḍa) では、彼は単一不可分な文意から概念知によって抽出 (appodhāra) された、文意を構成すると見なされる様々な語意について詳論する。

注目すべきことは、バルトリハリが『方位 詳解』(Diksamuddeśa) 章の最初の詩節 (VP3.6.1) において 方位・能成者 (sādhana)・行為 (kriyā)・時間 の四つを挙げ、能力 (śakti) として規定している点である。彼はこの四つの 能力 によって現象世界—彼にとっては意味の世界—の枠組みを説明しようとしている。例えば「デーヴァダッタがパタリプトラに行く」という事象すなわち文意の成立を説明するために、彼はパタリプトラに到着という結果をもたらす 能力 としての「行く」という 行為 を想定した上で、その 行為 の実現手段として 能成者 という 能力 を想定し、そして動態的な事象である 行為 の成立のために 時間能力 を、デーヴァダッタやパタリプトラといった静態的な事象つまり物体の成立のために 空間能力 を要請しているのである。

VP3.9.1 において「ある者達」は 時間 を単一・常住で遍在する、行為 とは別個に存在する 実体 であり、行為 を有するものの尺度であるものと見なす。「ある者達」が 時間 と見なすものは VP3.6.1 において言及されている、意味の世界の一部分であり、その世界を成立せしめるものである四つの 能力 の一つとしての 時間 に他ならない。文意を成立せしめる 能力 の一つとしての 時間 は日常的言語活動においては 実体 と理解されるのである。

バルトリハリはこの「ある者達」という言葉を使用することによって、彼が VP において「時間」という語によって理解される、言語表現上の 時間 について論じると同時

に、それとは異なる観点すなわち形而上学的な観点からも 時間 について論じていることを暗示している。「ある者達」(eke) という表現はここでは別観点或は別見解の提示を想定して使用されていると理解されるべきである。バルトリハリが形而上学的観点から 時間 について論じる箇所は、VP1.3 とそれに対する Vṛtti である。その箇所において、彼は 時間 を語ブラフマンが有する 自立性能力 (svātantryaśakti) と見なしている。「ある者達」という表現を含む VP3.9.1 が『時間 詳解』章の最初に位置づけられているのは、従って当該の詩節から始まる『時間 詳解』章においては、バルトリハリ自身が前の VP1.3 とそれに対する Vṛtti とは違って、形而上学的な観点からではなく、日常的言語活動の観点から 時間 を論じようとしているということを含意していると理解すべきであろう。

時間 のみならず、いかなる語意に関しても、彼はその語意を主題とするそれぞれの『詳解』章において必ず言語活動のレベルと形而上学のレベルという二つのレベルで論旨を展開している。VP3.9.1 における「ある者達」という表現の使用は、そのような意味で語意の根拠としての語ブラフマンの原理化と語意の抽出を通じた文意の分析という両方向で行われるという、VP 第三巻におけるバルトリハリの思索の傾向をよく示していると言えるであろう。

従来、VP3.9.1 はヘーラーラージャの注釈に基づいてヴァイシェーシカ学派の 時間 理解が紹介されている詩節として理解されてきた。しかし、この詩節において述べられている 時間 観をヴァイシェーシカ学派のものであるとするならば、バルトリハリが言語表現上の 時間 を論じ始めようとするとき、果たしてヴァイシェーシカ学派の見解の紹介から議論を進めようとしたのだろうかという疑問が起こるのを禁じ得ない。さらに、そのヴァイシェーシカ学派の 時間 観は VP3.6.1 における 時間 観や VP3.9.1 に後続する詩節において述べられている 時間 理解と相通じているとは理解し難いのである。